[成果情報名]イノシシ等の捕獲作業における従事者の負担
[要約]イノシシ等の捕獲作業の中で、止め刺し作業の 52%はナイフなどの刃物によるものであり、従事者にとって精神的、技術的な負担となっている
[キーワード]鳥獣被害対策、捕獲作業、止め刺し、作業負担
[担当]長崎県農林技術開発センター・研究企画部門・研究企画室
[連絡先]（直通）0957-26-4328
[区分]総合・営農
[分類]指導
[作成年度]2015 年度

[背景・ねらい]

イノシシ等の野生鳥獣による農作物被害の軽減や市街地への出没を防ぐためには、捕獲による個体数の低減が必要である。被害軽減のために有害鳥獣捕獲を安全かつ効率的に進めるためには、捕獲作業の中で何が問題となっているかを明らかとする必要がある。

そこで、長崎県内において実際にイノシシ等の捕獲作業に従事している人を対象としたアンケート調査により、捕獲作業における従事者の負担や問題点を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

１．止め刺し方法は、ナイフ等の刃物によるケースが 52%を占めている。銃による止め刺しの場合には、他の従事者に止め刺しだけを依頼するケースが 21%であり、自身の銃で止め刺しを行うケース（19%）よりも多い（図１）。
２．捕獲作業においては、従事者は各種作業に負担を感じている。特に止め刺しについては、技術的負担（回答者の 29%）に加え、精神的な負担（同 22%）も感じている（図２）。
３．捕獲した個体の埋焼却処分を負担に感じている者も 23%を占めており、イノシシ等がわなにかかってからの作業に負担を感じる者が多い傾向がある。

[成果の活用面・留意点]

１．　捕獲従事者を確保・育成し、更なるイノシシ等の捕獲を強化するためには、従事者が最も負担に感じる作業である止め刺しについて、安全で、かつ失血を伴わない技術の開発が必要である。
２．　他の作業においても負担が存在することから、特定の従事者にのみ労力負担等が集中しないように、地域をあげた捕獲体制の整備強化も必要である。

［具体的データ］

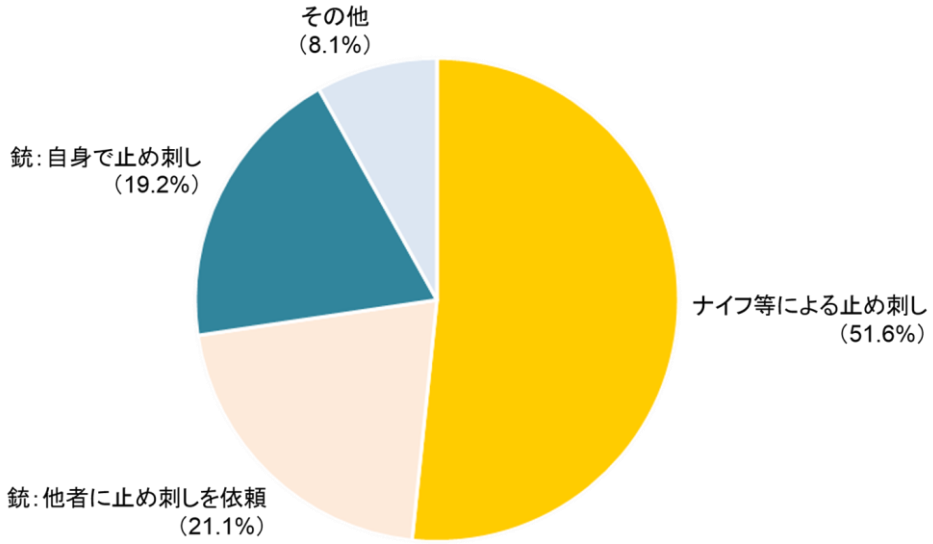

図１　イノシシ、シカを捕獲した際の止め刺し方法　（複数回答なし）

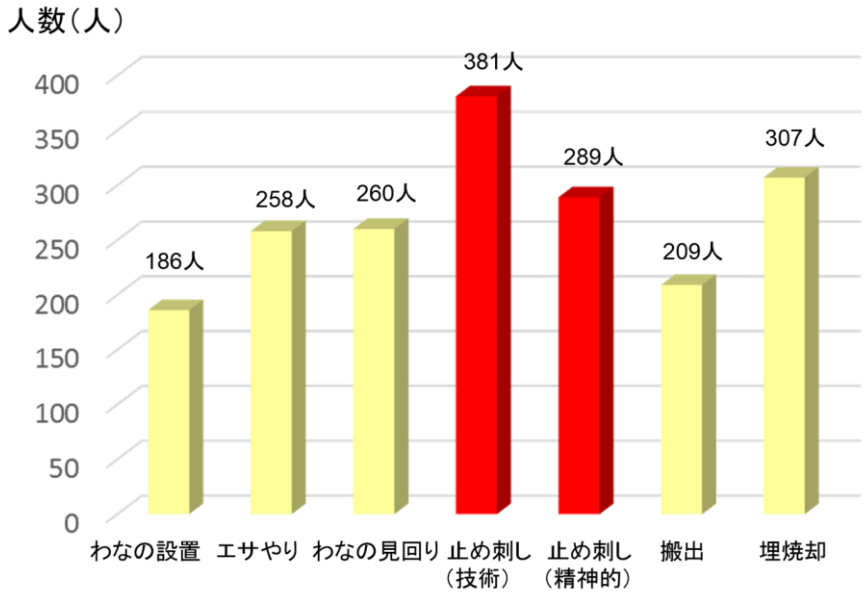

図２　捕獲作業で従事者が負担に感じている作業　（複数回答あり）

図１、図２共に長崎県狩猟免許所持者（2,434 名）を対象としたアンケート調査（2012 年度）から作成（有効回答数　1,311 件（53.9%））

［その他］

研究課題名：センサーわなのネットワーク化による野生動物捕獲システムの開発
　　ICT を用いたシカ、イノシシ、サルの防除、捕獲、処理一貫体系技術の実証
予算区分：　国庫（実用技術開発）、県単
研究期間：2012～2015 年度
研究担当者：平田滋樹、神田茂生